人体改造博物館４　　―後編―　サンプル

退院から三か月。傷の痛みが引いてからも、手術前にしていたような練習はせずゆったりと過ごした。朝起きたら傷口を確認してキスを一つ。それから蓄尿パックを替えて哺乳瓶で水分補給。朝食を食べ、腸内洗浄で便を出させて洗浄のために抜いたプラグをアナルに戻す。

尿道もアナルも、拡張が戻ってしまわないようにするだけでよかった。あれほど頑張って拡張したのだから、絶対に戻させない、と心に決めて忘れることなく道具を使う。あとは出勤のときまでキープできれば大丈夫。

そして手を繋いで歩行練習をして、たくさんハグとキスをして。穏やかな時間の中で、時折夕の涙を吸った。

「うぅ……やぁ……」

「夕……」

散々愛し抜いたペニスは竿がなくなり、残された亀頭は感覚がない。それがつらいと、夕は静かに涙を零した。

「夕」

名前を呼ぶことしかできず、抱きしめて背中や頭を撫でる。

夕がこうして泣くようになったのは、退院後一か月を過ぎた頃からだ。それまでは痛みや違和感、上手く話せないストレスもあって性欲を覚えるようなことはなかった。しかし、心身共に落ち着いてくれば、どうしたって性欲はむくむくと膨れ上がってしまう。

「うぅ……おちんちん……苦しいよお……」

まだ脳はペニスがあると思っているのだ。だから、苦しくなってしまう。前のような愛撫がほしくなってしまう。

「夕、おちんちんちゃんと亀頭のみになったよ」

「うぅ……亀頭……」

今のところ、夕が「おちんちんを返して」と言ったことは一度もない。だからきっと、ペニスを失ったことへの後悔はない。ただ、感覚がないことがつらいのだ。もし亀頭に感覚があればこれほど泣くことはなかっただろう。亀頭に触れて、その感触が伝われば「やっと亀頭のみになれた」と喜んだだろうと思う。

「夕、亀頭見ようか」

「篤さん……」

「夕の亀頭見せて。もう痛くはないね？　少し舐めてもいいかな」

「や……やだ……」

夕の表情には怯えがあった。胸を押され、距離を取られる。

「夕？」

「や……だって分かんないから……せっかく篤さんに舐めてもらっても……」

ああそうか、とそこでようやく理解した。

「うん、ごめんね」

でもこれは、藤永の望んでいたことだった。

「亀頭、分からなくてつらいね。でも俺はずっと夕の亀頭を愛してるよ。可愛い亀頭だから、いつでも見ていたいし触っていたい」

「ぁ……」

また一粒涙が落ちた。それを唇で擦り取りながら続ける。

「触られても分からないなら、ちゃんと見ていて。俺がどんな風に夕の亀頭を愛するのか」

「ぁ……あ……」

ふるふるとやはり怯えたように振られる首。でもそれが可愛くて。

「ほら、夕の亀頭。手術前はこうして撫でるだけでえっちな声を出していたね」

剥き出しのままカテーテルを咥える亀頭。家ではオムツは不要なので、また全裸の生活を続けている。

「や、やぁっ……！」

ローションはつけていないので、摩擦で皮膚を傷めないようにそっと親指の腹で撫でる。本当は撫でるふりでも夕にはバレないのだけれど、触れるか触れないかのタッチでそっと。

「ほら、いいこ……亀頭、手術頑張ったね」

「やぁ……やだぁ……」

「そうかな？　でも亀頭はきっと喜んでるよ。感覚がないからって放置されなくてよかったって」

「あ……。篤さん……」

ハッとした顔を見せた後、夕は藤永の腕を掴んだ。縋り付くような仕草が愛おしい。
「夕？」
「ん……僕の亀頭……もっと……」
「いいの？」
「だって……」
　このまま嫌がっていては放置されるようになる、と不安になったのだろう。そんなことはないのに。でもその勘違いは都合がいい。
「……うん、じゃあもう少しこうしてよしよししよう。痛いのに耐えたおちんちん、たくさん褒めてあげないとね」
「うぅ……」
　前だったら腰を揺らしたはずなのに。でも『敏感なそこを撫でているというのに反応がない』ということにまた興奮した。

　そして退院から半年後、まだ夕の亀頭の感覚は戻らないけれど、患部の痛みもなくなり、体力も回復したということでついに医師から出勤の許可が下りた。
　実際の出勤は研修生の入社に合せ、それまでは自宅で研修ビデオを観て勉強。そうしてついに研修教材になるための研修がスタートした。
「今日は『なしなし』を使った研修を見学するよ」
「なしなし……」
「そう」
「覚えてる？」
「はい。ツルツルの……おちんちんもタマタマもない展示品……です」
「そう。ちゃんと覚えてるね」
　夕は勉強熱心だったし、持ち前の強い被虐趣味によってどんな展示品であっても興味を示した。すごいなと思ったのは、どの展示品に対しても「無理」と思っていないらしいことだ。夕はとにかく何でもしたい、どんな風にも虐められたいと言っていた。
「でもツルツルって見られているだけでしたよね。どういう研修をするんですか」
　夕の疑問はもっともだった。亀頭なしや亀頭のみはそのペニスの残りを愛撫されることが多い。しかしなしなしに至っては弄りようがないのでただ撫でられるだけだったり、じっと見られるだけというのがほとんどだった。
　陰部は手術したいが亀頭のみのように弄られ続けるような強制連続絶頂は嫌とか、黒服が他人にあまり触らせたくないとか、なしなしを選ぶ理由は様々だ。でも実際には、外性器が一つも残らないという点では一番ハードな被虐性を持つものと言える。
「なしなしのお世話とかですか？」
「いや、一番使われるのは排泄物の処理の練習かな」
　当然術後のケアの教材にはなるけれど、如何せん弄る要素がないのでオムツ替えやミルキング、腸内洗浄の練習に使われることが多い。特に排便処理やミルキングは一つの教材で一日に使える回数が限られてくるので頭数は多い方がいいのだ。
「それからなしなしに特化した研修と言えば会陰責めかな」
「会陰？」
「そう。なしなしはおちんちんも陰嚢もないからね。性感帯として残ってるのはアナルと会陰ぐらいのものだから、特に敏感になってるんだよ。他の子では会陰の感覚が鈍くて練習にならなくても、なしなしはちゃんと会陰の良さを黒服に教えられるんだ」
　研修室に着いたので、夕の腰に手を添えて中に入れる。
　まだ教材担当黒服と教材は来ていなくて、中にはテキストを読み込む研修生が三人いるだけだった。
「おはようございます」
「おはよう」
　挨拶を返して正面左、自分達用に用意された椅子に二人で座る。
「前で見るんですね」
「研修生も前に来るけど、夕は教え方から学ばないといけないからね」
　部屋の中には学校の教室のように正面にホワイトボード、そこから後方に向かって順に教材が座る検診台、そして研修生が使う長机と椅子が数セット用意されている。
「夕も教材デビューしたらこんなに明るい部屋で足を開いて研修生に見てもらうんだよ」

「ぁ……はずかし……」
博物館の展示品なら自分が見られているところは見えない。しかしこの研修教材はじっくり見られるし、見られているところを意識しながら研修生に陰部の触り方や扱いを言葉で教えていかなければならないのだ。
「……そうだね。興奮するな、これから夕の恥ずかしいところやうんちが皆に見られると思うと」
「っ……ぁ……ダメ……」
「ん？」
「亀頭興奮しちゃうから……」
夕が顔を赤らめて言う。もう竿はないからと、夕は「勃起」という言葉をあまり使わなくなった。それがまたいやらしさを増している。
「興奮してないか見てあげようか」
夕は「え」と戸惑うような表情を見せた。その奥、視界の端にこちらをちらちら見る研修生の顔が入り込む。
「亀頭が興奮しちゃうとつらいでしょう。見せてごらん」
「や……」
嫌、と言いつつその顔は嫌がっていない。でも自ら脱ぐのは恥ずかしいから強引にしてほしい――そんな気持ちが見て取れた。
「……嫌ならしょうがないね。もうそろそろ教材も来るだろうし」
すっと身を引くと、夕が追いかけるように手を伸ばしてきた。素直な身体。それが可愛いけれど、今はもう少し虐めたかった。
「ほら、夕。教材がどんな風に自分の身体を説明するのかちゃんと勉強しようね」
タイミングよく入ってきた教材と教材担当黒服を見る。研修生たちが立ち上がるのを見て夕も急いで立ち上がり、二人に向かって頭を下げた。
「こんにちは。夕くんだよね。僕は理人《りひと》です。今日はよろしくね」
「佐沼だ。よろしく」
この職場の自慢の一つはスタッフの性格の良さだ。きっと交流する時間でもあれば皆仲良くなるのだろうけれど、黒服はともかく展示品は忙しさと疲れで他人と話す気力もほとんど残されていないから、あまり友人関係は築けない。
でもきっと、教材同士なら仲良くもなれるだろう。
「は、はいっ！　宜しくお願い致します」
先ほどまでの甘えた様子から一変してガバリと頭を下げた夕に、理人はそんなに畏まらないでとまた柔らかい笑顔を返してくる。それを見た夕がぽーっと顔を染めた。
「どうした」
「あ……いえ、優しいなって思って」
「……悪かったな、優しくなくて」
「っ！　優しいです……大好きです」
小さく呟かれた言葉はきっと誰にも聞こえていない。佐沼や理人は研修生たちと挨拶を交わしている。
「ん。よし、始まるよ」
「は、はい！」
夕と共に視線を戻すと、佐沼の手によって理人のバスローブが脱がされ、オムツ一枚の姿になった状態で検診台に座らされるところだった。
「まず、怖がらせないこと。オムツを替えるのは当然のことで、恥ずかしがる必要はないと教えることを頭に入れておきなさい」
「はい」
佐沼が研修生に説明をしながら理人の腹をそっと撫でた。
「うんちはどうかな」
「……出したいけど……出ないです」
「少しいきんでみようか。お尻の辺りにうんちはあるかな」
夕が息を呑む音が聞こえた。きっと便の位置まで説明しなければならないのかと思ったに違いない。でも教材がするべき説明は便の位置どころではない。
理人が少しの間目を閉じて無言の時間となった。それから恥ずかしそうに、けれどはっきりとした声で言う。
「うんち、どこにあるか分かりません。多分あるとは思うんですが」
「じゃあ確認してみようか」
「はい。指を入れて僕のうんちを確認してください」

今度は夕の肩がびくりと揺れる。考えていることはなんとなく想像がついた。自分に置き換えて感じているのだ。
「では研修生、オムツを外して指を入れ、便の位置を確認しなさい」
「はい」
研修生のうち、一番ガタイのいい男が一歩前へ踏み出した。そして教官からスキンとローションを受け取り、大きく開かれた理人の足の間に身体を入れる。
「すごい……」
思わず、と言った様子で研修生が呟いた。
「え？」
「本当に何もないんですね」
「……うん……おちんちんもたまたまもいらないの」
「どうやって気持ち良くなるんですか」
研修生が理人のアナルにローション入りのシリンジを突き挿した。
「っ……ぁ……ん……」
「教えてください」
注入を終えたシリンジを引き抜くと、今度はスキンを嵌めた指が宛てがわれた。けれどきっと、理人には見えていない。
「ストップ。話しながらもいいが、いきなり指を入れたりはしないように。驚かせないようにきちんと言葉で教えながら進めなさい」
「すみません。……うんちの確認をしますね。指を入れますよ」
「んっ……ぁん……はい……うんち……確認して……」
彼は少々嗜虐性が強いらしい。確かに展示品は被虐趣味の子ばかりだけれど、ただ虐めるのではなく甘やかさなくてはならない。それから安心も必要。ＳＭだって排泄だって、信頼関係がなければ成り立たない行為なのだ。
そして虐めるより先に甘やかし、慣れてきたところで徐々に自分のペースに引き込んでいく。それも、さりげなく。
幸い彼はきちんと反省と改善ができるらしい。安心させるようにお腹を撫でながら指でアナルを探っていく。
「痛くないですか？」
「ん……うんちぃ……」
今日の研修のため、恐らく理人は数日前から排便を禁止されていたはずだ。きっともう、出したくてたまらないだろう。
「……あ、これ……」
「んっ……ぁっ……」
理人が悩ましげな声を上げた。恐らく指で便を突かれているのだ。普通に生活していれば感じるはずのないその刺激に、性感を覚えてしまう子は多い。
「ありました。アナルから五センチほどのところに便があります」
「よし、では抜いていい」
研修生が指を引き抜いた。そしてスキンについた汚れに見入る。
「やっ！　見ないでっ」
理人がいやいやと首を振った。実に可愛らしい仕草だ。ちら、と隣にいる夕を見ると、少し拗ねたような顔で見返してきた。
「……可愛いですね」
「あ、ああ？」
どうしたのだろう、と思ったけれど、どうやら嫉妬しているらしいと気付く。しかし教材の身体を見るのは普段からあることだし、これからたくさんの研修生に身体を触らせる夕が嫉妬するというのはおかしいような気もする。
「……夕」
「はい……」
「……夕もあぁやって研修生に見られて触られるんだよ」
「っ……」
小声でやりとりしている間に、どうやら理人には浣腸を使うことになったらしい。先程の研修生が今度は大きめのシリンジをアナルに宛てがっている。
「ほら、皆の前でああして、俺以外の奴に浣腸されて……お漏らししないように必死に耐える顔も、ひくひくするアナルも全部見られるんだよ」

「ぁっ……」
拗ねた様子から一変して快感に耐えるような表情。本当に素直で愛らしい。
「でももう勃起するおちんちんもないから、夕が皆に見られて興奮しちゃってるってバレなくて済むね」
「ぁ……やぁ……」
「ん？」
夕が甘えた声を出す。可愛らしいが、今は抱き寄せてやれない。
「うぅ……おちんちんつらい……」
「こうして話しているだけでつらいなんて言っていたら教材になったときにどうする？　最初は俺以外の黒服が夕の身体を使って研修をするんだよ」
それは藤永にとっても夕にとっても大事な研修だ。藤永は教材の扱い方や客への説明の仕方を学ぶし、夕は教材としてどんなことを求められているのかを知ることができる。それに実際に展示品を扱う黒服に説明をされることで、夕はよりリアルに展示品の気持ちを味わうことができるのだ。
「んっ……頑張る……」
こういうところが好きだな、と思う。仕事だし、自分の役割だと分かっている。甘えるときは可愛く甘えるのにやるべきことはちゃんとやろうと頑張るところがいい。
「いいこ。頑張ろうね。家に帰ったらたくさん甘やかしてあげるから」
「ん」
こくん、と頷いたのを見て視線を理人に戻す。どうやら数分間我慢させるようだ。剥き出しのアナルには先程の研修生の指が栓の代わりに突き刺さっている。
「ああっ……痛いっ……お腹痛いッ」
「まだダメだよ、あと五分頑張ろうね」
優しい声で佐沼が慰めるが、すでに理人の我慢は限界だろう。ここから更に五分とはかなりきついに決まっている。
「やだぁ……無理っ、お腹痛いよお」
ぐす、と鼻を啜る音が聞こえた。声も鼻声になっている。つらいだろう。でも指で塞がれているし、無理にでも出してしまえば目の前にいる研修生を汚してしまうことになる。中身は本物の便だ。きっと全力で耐えているに違いない。
「こうやって可愛くねだられても、早く出したら意味がない。こういうときは乳首やペニスを弄ったり、キスをしてやって紛らわせてやるといい。しかし慣れてくれば甘やかすばかりじゃなく、その苦痛を楽しめるようにしてやらなければならない」
同じ内容を、藤永も研修生だったときに聞いた。そのときは痛みを伴う便意に耐えているときに愛撫するなんてと思ったものだけれど、隣で顔を赤らめている夕を見るとあながち間違ってもいないのだろうなと、最近になってようやく思えるようになった。
「しかし、この子はなしなしだ。弄るべき性器はないし、大好きなアナルは塞がっている。乳首でも感じることはできるが、せっかくだから会陰を責めてみなさい。ええと……松下くん、会陰を撫でてみて」
松下と呼ばれた研修生が一歩前に出た。栓の役割をしている研修生が半歩横にずれて場所を譲る。
「失礼します」
「出したいっ」
「まだダメだよ。指をちゃんと締め付けてごらん」
佐沼が理人に向かって甘い声を出す。まるで赤ん坊に対するように、優しい声。
「んんっ……だめぇっ……お腹痛いよおっ！」
いやいやと必死に首を振る理人の額にキスをして、佐沼は研修生に向き直った。
「もう意識が腹にしか向いてない。気を紛らわせてやりなさい」
「は、はいっ！」
松下がそっと会陰に触れた。それだけで教材の足に力が入るのが見てとれる。
「あっ……」
「最初は撫でて、それから指の腹でノックをするといい」
「はい」
どうやら松下は生真面目なタイプのようだ。しっかりと佐沼に返事を返した後、言われた通りの動作を行う。
「あっ！　ああっ！　ああっ！」
理人の会陰は随分開発が進んでいるらしい。まさか会陰で射精するなんてことはないだろうが、それに近い快感くらいなら得られるのかもしれない。あんな、何もないところで快感を得られるほど敏感な身体――ちら、と夕を見る。研修に見入っているので横顔しか見られないけれど、どうやら完全に自分に置き換えてその快感を感受しているようだった。

「夕、気持ち良さそうな顔してるよ」
　耳元で小さな声でからかう。すると夕の身体が大きく跳ねた。どうやら周りを忘れるほど夢中になっていたらしい。
「えっちな顔だ」
　夕がこちらを振り向くのを無視して視線を前に向ける。しばらく夕の視線を感じながらも真剣に研修生の様子を見ていると、ゆっくりと夕の視線もそちらに戻った。
「ぁああっ！　んっ、きもち……」
　理人は嬌声を上げ続けている。よほど気持ちがいいらしい。性器を切除することでこんなに敏感な身体になれるのなら、夕の性器も全て――いや、ないようなものだ。男が通常射精するのに必要な竿がない。夕はもう、十分射精しにくい身体になっている。今はそれだけで十分だ。今後もし物足りなくなるようならそのときは残した亀頭も切除してしまえばいい。すでに睾丸は会陰に埋め込んでいるので、それだけで理人と同じ「なしなし」になれる。
　そしたらきっと、もっと夕との生活を楽しめる。こんな風に大きく足を開かせてオナニーをさせたい。気持ちよくなれる場所がアナルしかない状態で、けれどアナルは浣腸液で使えなくさせてしまって。
　夕の身体を脳内で重ねながら理人を見つめていると、泣きそうな声が耳に入った。
「やあっ、やだぁ！　もう出したいッ！」

〜〜〜〜

　何かがアナルに差し込まれた。そして開かれる。
「あっ……お尻っ」
「夕？」
　そうだ、ここではきちんと言葉にしなければならないのだ。
「お尻、お尻の穴が開いてる……」
　もう研修生の手は離れている。でもアナルはぽかりと開いたまま。万が一便が残っていたらそのまま落ちてきてしまうんじゃないかと思うくらい。
「はい。夕さんのお尻ちゃんと開いてますよ。閉じたそうにしてますが、少し我慢してください」
「はい……」
（どうしようっ……恥ずかしいっ）
　恥ずかしいところを人に見られることは今まで何度も想像していた。実際に藤永にそれっぽくしてもらったこともある。でもまさか、これほど恥ずかしいなんて――同じことを先程も思ったばかりだ。でもやはりどうしても恥ずかしい。
「教官、アナルの用意ができました」
「よし、では中にカメラを」
　カメラは家でも使っているものだ。すごく細いものなので痛みはおろか、違和感を覚えることもない。
「見えてるか」
「いえ」
「ライト点いてるか」
「あ、すみません」
　そうだ。暗い内部はライトで照らされてモニターに映し出されるのだ。恥ずかしい。影もなく、襞の隙間まで見られてしまう。
「夕くん、せっかくだから夕くんもお腹の中見る？」
「えっ」
　佐沼を見ると、その手はまだ理人の股間の上にあった。でもそこにはないもないし、今は皆アナルに集中しているので邪魔にはなっていない。
（僕も……亀頭の上に手を置いてほしいな……）
　そしたらきっと安心できる。まだ亀頭には感覚が戻っていないので直接そこで手を感じることはできないけれど。
「み、見ておいた方がいいでしょうか」
　羨ましいなという思いを必死にやり込み質問で返す。その失礼を、佐沼は叱りはしなかった。
「そうだね。腸壁の溝に残った便はどんな感じになるのか確認しておいてもいいと思う。今の洗浄は二回だったね。二回でどれくらい綺麗になるのか……ほら、理人の直腸と比較すれば分かりやすいから」
　突然名前を出されたからか、理人の手に力が入った。
「……理人さん、僕も理人さんのお腹の中見せてもらってもいいですか」
「あ……夕くん……」

きっと恥ずかしいだろう。後輩にアナルの中を見せてほしいと頼まれるなんて。しかもその後輩の体内は洗浄されている。
「……うん……夕くん、僕の中見て……」
佐沼が理人の頭を優しく撫でた。いいこ、と褒めているみたい。それに理人も目を細めた。
「夕さん、どうぞ。こちらが夕さんのお腹の中で、あちらが理人さんのお腹の中です」
見やすいように掲げられたモニター。それはとても小さくて、簡単に運べるサイズだった。
「わ……」
なのに、画質はかなり鮮明だった。まるで最新のテレビを観ているかのような綺麗さで、てらてらと光るピンク色の腸壁も、うねった隙間に入っている茶色い異物もしっかりと確認できてしまう。
「やぁっ……」
茶色いものは夕にも理人にもあった。お湯で洗浄してもらったのに、やはり二回では完全には綺麗にならないらしいと知る。
「夕、お腹の中ちゃんと見ておこう。ジューサーの研修ではここを確認されてからフルーツを入れてもらうことになるんだよ」
「あ……あぁ……」
そうだ。ジューサーの仕事はこんなものではないのだ。フルーツを入れる前にも便がないか確認され、フルーツを潰された後でも確認のために中を確認され、そしてアナルを使い終わった後も次のお客さんのために洗浄してまた残りがないか確認されるのだ。
「夕くん……恥ずかしいけど頑張ろう……」
そういう理人の声も震えていた。
「はい……あ……すごい……」
理人の体内は汚れていた。便で茶色くなっている。二つのモニターはあまりにも対照的だった。でもどちらもいやらしい。
「もし複数回洗浄をして、吐き出した湯が透明でもこうしてカメラに映っている、ということがある場合は、その場所だけをピンポイントで洗うことになる。こびりついた便は少し強めの湯で洗い流すんだ。夕くん、少しだけ体験してみる？」
「え……」
今見えている便はこびりついた汚れだということなのだろうか。家ではジューサーの練習もしているので、もしそうだとすると藤永に申し訳が立たない。
戸惑っていると、心情に気付いてくれた藤永が優しく言った。
「夕、大丈夫、夕の中のこびりついたうんちは俺が綺麗にしていたから」
「ほんと……？」
それならよかった。確かにいくら藤永でも、中に汚れがある状態でジューサーの練習はさせなかっただろう。
「あの、洗浄お願いします」
内部がどれほど綺麗になるのか興味があった。それに、ピンポイントで洗い流すなんて今までされたことがない。
「研修生、準備を」
「はい。あ、ですが僕たちはまだ実習していません」
「説明は？」
「受けてます」
「……夕くん、どうかな。怖い？　俺か藤永がしてみせようか」
慣れている人にしてほしい、と正直思った。けれど未経験者の練習台になることが教材の仕事なのだ、と自分に言い聞かせる。
「いえ……僕の身体を練習に使ってください」
佐沼は少し心配そうな顔をしていたけれど、藤永は頭を撫でてくれた。それに研修生も頑張りますと言ってくれたので、あとは任せることにして目を閉じる。
（ドキドキする……）
一体どんな風に洗われるのだろう。腸内洗浄機よりも「洗われる」イメージが強いように感じる。
「夕さん、では洗っていきます。モニターを見ていてください」
どうやらカメラ操作用のモニターは別にあるらしい。見やすいようにと掲げてもらったモニターをじっと見る。
そこには腸壁の谷間に残った茶色い便がアップになって映っていた。そこにカメラが近付いていく。
「や、やぁっ」
「夕」

とっさに藤永に手を伸ばすと、その気持ちに寄り添うように抱きしめてくれた。
「夕、夕のうんちも見てもらえて嬉しいね」
「あ……」
そうだ。今までは藤永しか見て来なかった排泄物。それを今皆に見られ、勉強に使われているのだ。
「ン……」
でもさすがに嬉しいと口にすることはできなかった。小さく頷き、藤永から腕を離してモニターを見る。
「このカメラについたチューブから少し強めのお湯が出るんだよ。その水圧で便を剥がす」
佐沼の説明を聞き、頷いたところで今度は研修生が口を開いた。
「では始めます。痛かったら言ってください」
ドキドキした。興奮も、緊張もあった。でもやはり、興奮の方が強くて。
「あ……あ……」
いつお湯が出るのだろう。こびりついたものを剥がすというのだからきっと水圧は強いのだろう。
「出ます」
「あっ……あああああ！」
きっと実際には水鉄砲程度の水圧なのだろう。でも敏感で繊細なそこには強く感じてしまう。
「あ、あ、あ」
「夕、夕」
「あっ、うんちっ、うんちっ！」
開かれたままのアナルから、噴射されたお湯がどばどばと流れ落ちていく。その感覚がまるで下痢便を排泄しているときのようで。
「ああっ、あっ、だめ、だめぇっ！」
「夕、大丈夫、うんちじゃないよ。お腹の中に残ったうんちを綺麗にしてもらっているだけだよ」
「あ、ああっ！」
藤永の声は聞こえているのに、意識をアナルから逸らすことができない。気持ちいい。痛い。でもやっぱり気持ちいい。
「ああっ！」
「一度止めて」
「はい」
佐沼の一言でお湯はピタリと止まった。しかし中に入ったお湯はだらだらと零れていく。
「夕くん、大丈夫？」
「あ……はい……」
止まればもう、感覚が後をひくことはなかった。少し深めの呼吸を意識して、気を取り戻す。
「夕くん、モニターを見てごらん」
視線をモニターに戻す。するとそこには先程よりは少し減ったものの、まだ茶色いものが残っていた。
「うそっ！」
しっかり洗われたように思っていたのに、どうしてまだ便が残っているのだろうか。
「偶然だと思うんだけど、どうやらしっかりこびりついてしまっているようだね。ここを綺麗にしてみようと思うんだけど」
「あ……」
どうしよう。ここ数日はジューサーの練習はしていなかったけれど、もし古い便がずっと残ってしまっていたのだとしたら。
（篤さん……）
このアナルを使ってもらったことは数えきれない。最初のうちはセックスもしてもらっていたし、少し前はジューサーの練習として実際にジュースを作って飲んでもらった。なのに、便がこびりついていたなんて。
「夕くん、怖くないよ。少しつらいかもしれないが、これでお腹の中を綺麗にして終ろう」
佐沼の言葉にハッとして時計を見る。研修のスケジュールを思い出すと、そういやあと十分ほどで終わりの時間だった。もうぐずぐずしている暇はない。
「はい……くっついてるの、綺麗にしてください……」
まさかこんなにたくさんの人がいるところでこびりつき便の存在を知ってしまうとは思わなかった。さすがにちょっと、恥ずかしいを通り越した感じ。
「夕、いいこ。頑張ろうな」
「篤さん……」
なぜか、藤永は嫌悪感を示さなかった。もしかしたら口にしたものの中に便が混じっていたかもしれ

ないというのに。
「失礼します」
もっといろいろ思うところはあった。けれどもう時間がないからか、研修生もすぐにアナルに意識を戻してしまう。
「次は腸壁を専用のブラシで擦っていきます。傷付けないようにそっとしますので」
「ぁ……」
見せられたのはぐるりと三百六十度カバーした歯ブラシのようなものだった。でも毛先はとても柔らかそう。
「入れますね」
入れられても、大きく開かれたアナルでは縁に当たる手しか感じることはない。しかし、視覚からの情報は違う。
「あ……」
モニターには腸壁と共にブラシが映っていた。恐らくカメラの近くにブラシをセットしてあるのだろう。
「擦ります」
「あ……あ……っ」
ゆっくりとブラシが腸壁を擦る。カメラも揺れるが、しっかりと見える。
「あ……うそぉっ、あっ……」
感じたことのない感覚だった。快感とも不快感とも取れるが、痛みはない。でも、勝手に腹筋に力が入る。
「あっ」
「夕、」
「あっ、あっ……」
シャ、シャと聞こえないはずの音が聞こえるような感じさえする。きっとモニターからの情報によって脳が勘違いをしているだけなのだろうけれど、それでも音が、聞こえる。
シャ、シャ――。
「あっ、あっ……」

～～～～

黒服に促され、バスローブを脱いで教卓横の開脚椅子に座った。その場で丁寧にオムツを剥かれ、足置きに足を乗せられればもう陰部は全て丸見えの状態になる。
「ああ、夕くんは陰嚢もないんだったね。会陰が少しふっくらしてる」
「ぁ……」
そんな風に感想を言われたのは初めてだった。それに優しい言い方にぞくぞくする。
「なだらかなだけの陰部に亀頭だけっていうのがいいね」
「ぁ……ン……」
恥ずかしい。感じてしまう。でも今からされるのは自動ミルキングだ。快感は少しももらえない。だから今感じれば感じるほどつらくなってしまう。
でも、この優しい人に説明をされ、快感なくして精を抜き取られる、と思うと――。
「よし、じゃあ誰か二人前に出て」
黒服の声掛けに、研修生のうち二人が前に出てきた。
「精嚢は左右に一つずつ、計二つあります。一緒に押すことはせず、必ず一つずつ膨らませるように」
説明を終えた黒服が二人の研修生にボタンを渡した。見えない電波か何かでこの体内に繋がっている、バルーンのためのボタン。
「じゃあまず右から。ボタンを押してください」
研修生が頷いた。そしてお腹の奥というか、腰の中で感じる圧迫感。
「あっ、あっ……」
何かが出ている。まるで失禁をしているかのように。
「ああ、夕くんはとても上手にミルキングが受けられるね」
「っ……や、あっ……」
複数の人に見られながら、藤永以外の人によってミルキングをされる快感。恋人以外にされる行為で感じるなんてダメだと頭では分かっているのに気持ちいい。
（変っ……）
普通ならミルキングなんてつらいばかりだ。藤永にしてもらうときも苦しくて、悲しくて、せっかく

作った精液が無駄なものとして捨てられる切なさに苛まれ、ミルキングの後は数十分藤永に抱きしめていてもらうくらいなのだ。それなのに――。
「んっ……」
「うん？　夕くん、ミルキングで感じてるの？」
今日の教官役の黒服が言った。驚いているのはきっと彼のパートナーがミルキングで感じたことがないからなのだろう。
「や……えっと……見られるのが……」
「ああ、夕くんは見られるのが好きなんだ」
穏やかな顔。やはり研修生に説明をしていたときとは声のトーンも口調も全く違う。柔らかくて、とにかく優しい。まるで特別扱いされているような気になってしまう。
「ん……ぁ……」
「……もしかして、見られる以外にも感じちゃう理由があるのかな？」
教えてほしいな、と朗らかに言われて拒否なんてできるはずがなかった。
「ん……藤永さん……んっ……以外にされるのが……」
「ああ……夕くんは他の人にされて感じちゃうタイプなんだ。普通なら恋人にしか見せないはずのえっちなところ、皆に見られて、ミルキングまでしてもらって嬉しくなっちゃったんだね」
ぞくぞくした。だってこんなの言葉責めだ。優しい雰囲気なのに言っていることはとても意地悪で、しかも藤永のいる前で言われているという興奮。
「ぁっ……んん、ああっ」
「教官、右からはもう出ません」
「よしでは一度萎ませて、完全に小さくなってから左を」
「はい」
研修の事務的な会話がなされている。そうだ、この人たちは研修という名の仕事をしているのだ。なのに一人で勝手に感じて楽しんでしまった。
「ぁっ……」
だからきちんとしないと、と思った矢先、左側のバルーンが膨らんだ。気持ちいい。精嚢が圧迫されていく。
「あっ……ン……」
とろ……たら……と液体が亀頭から漏れ出した。こんなに気持ちいいのに、もう勃起すべきペニスは残っていなくて、あるのはただ亀頭だけ。でもその亀頭に開いたままの穴からつー……と体液が漏れ出る様子はいやらしさの極みのようにさえ思えた。
「よし、全部出ましたね。これで精嚢バルーンの研修は終わりです。大事なのはさっき言ったことに加え、今したように展示品の様子を確認しながらすること。バルーンは破裂するほど大きくなりはしませんが、中にはそうなるんじゃないかと怯える展示品もいます。最初はゆっくり小さな膨らみから始めて徐々に慣らしていくように」

～～～

「いいこ。おしっこ美味しかったよ」
夕の横に寝転び腕枕をする。そして頭を引き寄せ、もう片方の手は陰部に伸ばし亀頭に触れる。
「夕」
「あっ……」
声が近いと夕の感度は更に上がる。
「夕、ここ、どうだった？　誰が上手だったかな」
「あっ……ああっ」
「喘いでいたら分からないよ。夕は誰に触られるのが一番気持ち良かった？」
「あっ……んっ……佐久間くん……」
「佐久間か……佐久間が例の、四肢欠損を望む子だよ。見込みはあったかな」
「んっ……触り方は上手だった……」
「そう。夕は佐久間に触られて感じちゃったということだね」
「やぁん……や、篤さんがいい……」
「本当に？　でもここ何年も俺しか触っていなかったから、久しぶりに他の人の手に弄られて嬉しかったんじゃないか」
「違っ……」
「本当に？　でも佐久間の触り方が良かったんだろう」

「やああっ」
くるくるくるくる――亀頭を撫でながら話を続ける。
「夕、亀頭つらかった？」
「つらかったっ！」
「何がつらかった？」
「あっ、あっつ、篤さん以外に触られたことっ」
「でも喜んでたよ。イっちゃってたね」
「あっ……」
恐らく気付いてないと思っていたのだろう。でも夕のことなら何でも分かる。イく瞬間手をぎゅっと握る癖や、出すものもないのにひくつく尿道口。それに声が少しだけ変わるのだ。
「俺以外の手でイっちゃって……お仕置きが必要だね。イっちゃいけないよって先に言っておいたのに」
「やぁっ……ごめんなさっ……」
「……可愛い」
自分も甘くなったな、と思う。出会ってすぐ、手術前の頃はとにかくきつく弄っていたと言うのに。年をとったからだろうか、どうしても虐め抜くことができない。
「夕、自分で弄ってごらん」
「え……？」
「佐久間に触られてイっちゃったおちんちん、自分で触ってリセットしてごらん。オナニーで上手にイけたら入れてあげる」
「あ……や、無理っ、無理だよおっ」
夕が泣きそうな顔で縋り付いてくる。狙い通り。その顔が見たかった。
「夕。でも夕のおちんちんは約束を守れなかったよ。ずっといいこのおちんちんだったのに、久しぶりにお仕事をして悪いこに戻っちゃったのかな」
あんなにたくさん躾けていいこにしてあげたのにね――そうやって仕事をしていた頃のことを蒸し返す。するとの尿道口がまたひくひくと動いた。
「ん？　昔のことを思い出すだけでひくひくさせちゃう？　やっぱり誰の手でもイっちゃう悪いこだから淫乱なのかな」
「やっ……ちが……そんなこと……」
「でも佐久間に弄られて、他の研修生に見られながらイっちゃったね。その前にミルキングの練習がなかったら、きっと佐久間たちのスーツを精液で汚しちゃってたんじゃないかな」
「っ……ちがっ……」
「本当に？　あぁ、おちんちんがないから……亀頭しかないから飛ばないね。だから出しちゃっても大丈夫だったのかな」
「やっ……やだぁ……ごめんなさい……イっちゃってごめんなさいぃ……」
「ちゃんとごめんなさいが言えたけど……明日の研修でイってしまわないように今のうちにたくさんイっておこうか」
「んっ……僕のおちんちん悪いこだから明日絶対にイけないようにして……」
「でもたくさん弄ったら、明日皆に夕が俺にたくさん亀頭かまってもらったってばれちゃうよ？」
「いいっ！　だって篤さんのおちんちんだから……篤さんだけは好きにしてもいいおちんちんだから……」
「……いいこ。夕はいいこだね。この身体が誰のものかちゃんと分かってる」
「あ……ほんと……？」
見上げてくる夕の目には涙が溜まっていた。瞬き一つで落ちそうなほど潤んでいる。
「うん。本当」
「うれし……篤さん、僕のお尻も篤さんのだよね？」
「そうだよ。この可愛い目も、いやらしいお口も、感じやすいおっぱいも、亀頭しかないおちんちんも会陰のなかにある睾丸もガバガバなままのアナルも、全部俺のだよ。夕の身体を今のこの身体にしたのは俺でしょう」
「んっ……使って。早く僕の身体使ってっ！」
イかせて、と言わないところが躾の賜物だろう。この身体は藤永のものだから、絶頂の有無を決めるのは夕ではないということ。そして当然、所有者は藤永なのだからこの身体を自由に使うことができる。
「あぁ……じゃあオナホールを入れよう」
特別仕様のオナホールは、全てが入り込んでしまわぬよう根元の部分が広がった作りになっている。それをヘッドボードから取り出し、先程研修生が入れたローションを利用して夕の身体に埋めていく。
「あっ……」

「痛い？」
「んっ……足りない……」
　オナホール越しのセックスに慣れた夕は、オナホール自体の太さでは満足できない。ここに藤永のペニスが挿入され、オナホールが膨らめば太さとしてはちょうどいい。しかし、オナホールは藤永のペニスを擦るための玩具であって夕を満足させるためのものではないので、夕は絶頂を得るほどの感覚を得ることはできない。
　しかし、それも夕が望んだことだ。自分の快感を無視して藤永に尽くす。
「よし、入れるよ。アナルを締めて」
「んっ……」
　夕がオナホールを締めつけて固定する。そこに、半ば強引にペニスをねじ込んでいく。
「あぁ……すごいよ、すごくよく締まる」
「嬉しい……」
「夕、今日は夕が本当によく頑張ったからご褒美をあげるよ」
「え？」
　藤永が激しく動けば、揺れるオナホールによって夕も多少なら快感を与えることができる。けれど今は会話のためにゆったりとしか動いてはやらない。
「ご褒美に中に出してあげる」
「え……まさか……」
「貫通型だよ」
「あ……うれし……精液、くれる……？」
「あぁ。これで夕が孕んだらいいのに、と思うよ」
　先の開いた貫通型のオナホール。射精のときに最奥まで押し込めば、オナホールを越えて夕の体内に精を吐き出すことができるのだ。
「俺が射精できるように、ちゃんと締めてて」

約５万１千文字です。
宜しくお願い致します。

ツイッター
@gooneone11